

**\*現代宗教学への招待\*\*\***

S.Ashina

<前回> (聖なるもの = 「S - M - O」における「O」 = 信仰の対象)

- ・聖なるものの現象学
- ・ファン・デル・レーウの『宗教現象学入門』(東京大学出版会)
  - 日常的・俗的なものから際立った力、意志的(自由の主体)、形態的  
名称(名)を有する 人格神(有神論)
- ・聖書の神：究極的関心を可能にするほどの力で人間に関わり、コミュニケーション可能な意志的な存在者(意志・形態・名)
- ・オッター：魅する秘義(mysterium fascinans) - 戦慄すべき秘義(mysterium tremendum)

**2 - 3 : ヒエロファニーとコスモス(意味ある世界)**

11. ヒエロファニー = 聖なるものの顕現(経験可能な領域への具象的現れ)
  12. 遠ざかる最高神(隔絶神) 聖なるものの忘却と死
  13. 「この三柱も神は、みな独神と成りまして、身を隠したひき」(『古事記』冒頭)
  14. 三層構造世界観・世界軸、カオスからコスモスへ(創世神話)
  15. 聖と俗との緊張
  16. ヒエロファニーとコスモス(秩序ある居住可能な世界)の生成：
    - 秩序の三重構造：国土 - 都市 - 建物
  17. 教会建築のコスモロジー
  18. 都市のコスモロジー、都の条件は何か
    - 平城京、平安京、江戸
- ・宗教経験の構造：聖と俗(超越と内在、意味根拠と意味世界)
    - 魅惑と戦慄(善と悪、愛と怒り)

**第3講：宗教現象の基本構造****3：宗教的象徴と言語**

1. 「S - M - O」モデルにおけるMの意義 宗教的現実性は象徴によって構成される  
(= 象徴世界)
  - M：媒介機能(実体ではなく機能に着目)
2. 人間 = 象徴を操る動物(animal symbolicum)：人間による意味世界の構築
3. 「言葉の宗教」としてのキリスト教 言語・意味・聴覚の優位 cf. ギリシャ
  - ・言語行為と創造行為 ・「イスラエルよ、聞け」(申命記)
  - ・「この律法を口から離すことなく」(ヨシュア記 1:8)
  - ・「信仰は聞くことにより、キリストの言葉を聞くことによって始まる」(Rom.10:17)
  - ・キリスト(神の言葉、先在のロゴスの受肉) - 聖書 - 説教
4. 神象徴と経験領域(宗教経験 - 表現形態)
  - 神 < 超越性 / 内在性、不可視性・偶像禁止 / 経験可能性 > 神自体と神表象の区別
  - (1) 旧約聖書の神象徴：詩編

盾、やぐら（砦の塔）、避け所	軍事
腕、足	身体
父、主、牧者	社会関係、人格、生産

(2)キリスト（キリスト論的称号）

神の子、人の子、ダビデの子、救い主（メシア）、主、ロゴス  
道、真理、いのち（ヨハネ的象徴）  
魚（形態化）

(3)聖霊：「わたしは<霊>が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た」（ヨハネ 1:32）

6. 媒介機能の二つの次元

意味の媒介      言語（ラング、パロール）

体系性：記号体系内における諸記号との関係（差異性）      記号論  
「意味は実体ではなく関係である」

恣意性：      正当化の問題

歴史性：メッセージ・了解・伝承      解釈学

多義性：

力の媒介（効果）

意識・無意識・感性・身体の諸レベルへの効果      説得力

7. 力・作用・効果の媒介の二つのレベル

心理的レベル      現実開示（意味の発見）と心の開示  
ex)芸術、美的経験  
心の統合機能（精神分析）

共同体的レベル

共同体の統合      統合・排除の二重性（境界設定）

8. 聖なるものの経験・ヒエロファニー（経験と象徴表現の相互連関・循環性）

究極的関心・生の形態化  
教義・思想・観念・体系      倫理・実践

<ブックガイド>

- 1:池上嘉彦 『記号論への招待』（岩波新書）
- 2:森 哲郎 他編 『経験と言語』（大明堂）
- 3:島園 進 他編 『宗教のことば』（＼）
- 4:リクール 『聖書解釈学』（ヨルダン社）
- 5:長谷正當 『象徴と想像力』（創文社）
- 6:丸山圭三郎 『言葉と無意識』『言葉・狂気・エロス』（講談社現代新書）  
『カオスモスの運動』（講談社学術文庫）
- 7:並木浩一 『旧約聖書における文化と人間』（教文館）
- 8:ソントーク 『隠喩としての病』（みすず書房）
- 9:宮本・山本・大貫 『聖書の言葉を超えて ソクラテス・イエス・ゲーテ』（東京大学出版会）
- 10:立川健二・山田広昭 『現代言語論』（新曜社）